

地域=人

社会福祉学部保健福祉学科 2年 瀬間 美里

活動先：NPO 法人 だいこんの花

クラス：野尻 紀恵 先生

1. 自分の成長と気づき

今回のサービスラーニングの活動は、地域福祉に関わることに限らずにも学ばされた点が数多くある。わたしは、最初からサービスラーニングを希望したわけではない。休学からの復学のためにいつの間にか振り分けられていて、バスツアーも参加できないままサービスラーニングの授業が始まった。地域福祉に関しても知識も経験もなく、実際に活動させていただく NPO がそれぞれどのような活動をしているかさえわからなかった。そのため、この授業に対しては戸惑いしかなかった。事前学習も現実味のない内容に感じたし、実際に活動に行くという大前提がない状態で学習していたように思う。

しかし、いざだいこん畑に訪問させていただき、実際に活動する日程を決めだすと、いよいよ活動するという感覚が芽生え始めた。しかし、計画はしたもの、提案をしてみると施設の構造上の都合やわたしたちのアイデアに新鮮味がないために、実現させるには厳しい内容が多かった。自分たちの創造力や発想力のなさを感じた。いくら考えても良いと思われる案が出ず、ようやく決まった計画も職員の方には新鮮味に欠けていたと思う。そう思うと、だんだんこの活動をできるのか不安になっていき、自信も失った。しかし、活動の日は刻一刻と迫っていき、そのような悶々とした状態で準備もほぼできず、いよいよ前日までできてしまった。その時ようやく NPO の職員の方からのご連絡とご注意により、とんでもないことをしたと気づかされた。わたしたちが計画に携わった夏祭りは、毎年利用者の方が大変楽しみにされているものだった。職員の方は毎年利用者の方を楽しませ、期待に応えるため、事前の準備を早くから着実に行っていた。それに比べてわたしたちは、前日まで何もしなかった。この差がどういうものか、わたしたちは考えていなかったのだ。その時は申し訳なさや焦りという感情が強く残り、活動初日から、恐る恐る現場に入り、活動に参加した。しかし、夏祭りは職員の方々のご協力でなんとか準備が間に合い、実行することができた。当日も二日間通してスムーズに終わることができた。ぎりぎりの準備で不安でいっぱい、睡眠もままならないまま突っ走った計画だったが、利用者の方々からたくさんの感謝の言葉をいただいた。中には涙を流して感動してくださった方もいらした。それを受けて初めて、自分たちの行動が相手の利益、不利益に直接映し出されるということがわかった。そしてそれに責任を持つことがどんなに重要かがわかった。同時に、計画、当日の職員の方々の本気で考え、行動し、協力してくださる姿を見て、利用者の方に対する深い愛情も感じることもできた。

正直に言うと、最初からこのモチベーションを持っていれば、もっと深い学びを得ることができたと思う。そのため、わたしは本来のサービスラーニングの学びに到達できなかったと感じている。しかし、今回の活動で人と人との関わりが全てを支えていると学んだ。職員の方と利用者の方、その家族、3者が思い合い、感謝を享受し合っている。“相手のために”という気持ちがこのような活動を作り上げている。そしてそれにより、新たな発見

やそれぞれの学びに繋がっていると思う。今回はわたしたち学生もその人同士の関わりによって救われ、学びを得ることができた。相手がある関係性は NPO に限らず全ての人間の営みに絶対的に存在するものである。今回学んだ責任感や相手への思いやりということを意識して生活に繋げていきたい。

2. 活動を通して見えてきた地域活動や社会活動

今回活動させていただいたこんの花の理念は“お互い様”ということだ。困った時はお互い様、だから助け合おうという考えからこの NPO の活動が展開されている。わたしたちが体験させていただいたその具体的な内容として、訪問介護やデイサービスがある。訪問介護ではその方の生活全てに直面する。そしてその状況は様々であり、自分の生活感覚では想像もできない状況下に置かれている人もいる。その中で助け合うということは難しいのではないかと感じた。それは一般的な施設のように、一方的に“支援してあげる”という姿勢が出るのではないかと思ったからである。しかし、わたしが同行させていただいたこんの花の理事長は、食事や洗濯をする中でも利用者の方と常にコミュニケーションをとり、そしてその対応は本当にご近所付き合いのようなやりとりに感じた。何かをしてあげるのではなく、“自分たちの住む地域にいる人が困っているから手伝う”という意識が強いのだ。そして、それがだいこんの花の職員の方の当たり前なのだ。わたしはこの感覚が地域福祉の理想なのではないかと思う。支援者と利用者という関係性は一方的な支援を生みやすく、その人の困っている部分にだけ焦点が当てられ、生活に密着することは難しい。しかし、同じ地域住民という、家族や仲間のような意識が住民に根付けば、助け合いが自然に生まれるのではないだろうか。そうなるとうまくゆくと“福祉”という単体の概念はなくなるかもしれない。しかし、現状では全ての地域がそのような力を持つのは難しい。そこでわたしたちのように福祉に携わる者が地域住民の媒介となり、住民のニーズを満たし、住民同士を繋いでいくことで、その地域自体が自分たちで自分たちを助け合う力を持つようにしていくことが地域福祉の課題だと考える。

日本では昔からご近所付き合いがある。ご老人同士のお茶会や、外出時に子どもを少し見てほしいなど、ご近所で助け合うということは、わたしが住んできた地域にも数多くあった。今日ではインターネットの普及などにより、それらが薄くなっているように感じる。そしてそれにより地域はより住みにくくなり、またそのことがコミュニケーション能力や積極性、思いやりなど様々な人間力の育成をも阻んでいる原因の一つになっているのではないだろうか。わたしが今できることは、改めてご近所や関わっている人との付き合い方を見直し、その関係性を深めていくことだ。

地域は人で成り立っている。“隣にいる人が困っていたら手伝う”ということは、地域のためであるが、それは同時に自分が困った時は助けてもらえるということでもある。そこに“人同士の社会保障”が生まれ、より住みやすい地域となり、結果的には自分のためになるのではないだろうか。